

“安威の聖人” 富士正晴を伝える

「安威の聖人」富士正晴さん逝く」これは、1987（昭和62）年7月16日付、大阪新聞が富士さんの訃報を伝えたときの見出しです。富士さんは1913（大正2）年10月30日、徳島県三好郡に生まれ、その後、家族と転々としたあと生涯の後半生を茨木市安威で過ごしました。そして、詩、小説、評論、伝記、雑文、中国文学など、50冊余りの著作と多くの文人画を残しました。その業績を称えて、茨木市には「富士正晴記念館」が中央図書館に併設されています。今回はこの富士正晴さんについて、作風の背景にある生き方などを、生前に交流のあった古賀光（本名 安光 光）さんに聞きました。



縁先にて（茨木市安威の自宅） 昭和50年11月

富士正晴という人

茨木市民でも富士正晴さんのことを知っている人はそれほど多くないようです。

富士さんは、38歳のとき茨木の安威に移り住みました。以後亡くなるまで、この竹林に囲まれた古屋で活動し、「竹林の隠者」と言われるようになりました。

5歳のとき、富士さんの一家は朝鮮の平壤に移り、そこで通常より1年早く満5歳で小学校に入学しました。後年、この早い入学について「気分的にも、肉体的にも少々重荷であったのではないかな」と書いています。大正10年に一家は帰国し、神戸に移り住みました。医者になってほしいという父親の期待に応えるために勉学に励みますが、自分の思いとは合わなかったようです。それでも、旧制三高（現京都大）理科甲類に合格して父親を喜ばせました。しかし、大の学校ざらいもあって、落第を重ね、退学してしまいます。このとき富士さんは、「学校は上へ卒業するのではなく、横へ卒業する仕方もある」と豪語したそうです。それゆえ、思想や文学を業とする知識人の理屈をこねまわしたような文章を信用しませんでした。そして、友人が書き留めたノートの詩を見て文学の面白さに目覚めます。



「VIKING」表紙は富士さん作

1944年に31歳で陸軍に召集され、中国の戦線を行軍しました。その戦火の中で、富士さんは、必ず生きて帰ること、戦時強姦をしないこと、附則として大いに飯を食らうこと、そしてビンタを喰らっても無理な仕事を避けること、という「鉄則」を設けたそうです。戦後、富士さんは20年近くかかって戦争体験を作品にしましたが、そのほとんどは富士さん自身の体験を「記録」したようなものでした。戦争小説を書く動機を「加害者として中国人を殺し、いじめている兵隊たちが何やら被害者めいて物悲しく感じたことの方が多い。しかし、それを悲しいものと表現するような気分でもなく、ただ事実を事実としてながめ、その見たところをはっきり書き残しておこうというだけで書いてきたようだ」と述べています。これは、戦争という非日常では、加害者も被害者も同じような不条理を背負っているのだと理解していたためと思われる。

復員後、1947年に作家たちの発表機関を作るために、同人誌「VIKING」を神戸で創刊しました。最初は紙を集め、

ガリを切ったの仲間による手作業での出版でした（36号から活版印刷）。その後「VIKING」は長く続かなかで多くの後輩作家を育てました。また、三島由紀夫が文壇にデビューした「花ざかりの森」の出版を手助けしたことから、三島は「この本の生みの親は富士さんだ」と記しています。

富士正晴さんの作品は、「敗走」、「徴用老人列伝」、「競輪」で芥川賞候補になり、「帝国軍隊に於ける学習・序」では直木賞候補にも挙げられました。また「桂春団治」で毎日出版文化賞、大阪芸術賞、関西大賞大詩仙賞を受賞するなど、数多くの小説、エッセイを残しました。歴史小説の「タンポポの歌」は「豪姫」と改題されて、1992年に勅使河原宏監督、宮沢りえ主演で映画化もされました。その一方で座談の名手でもあり、詩人の伊藤静雄、仏文学者の桑原武夫、作家の司馬遼太郎、瀬戸内寂聴、落語家の笑福亭仁鶴、映画評論家の淀川長治など多くの著名人たちとわたり合い、歯に衣をきせぬ放言ぶりで、ユーモアが遺憾なく発揮されました。



古賀光（こがてる）本名 安光 光

1941年京都宇治に生まれる
京都女子大学文学部国文科2部卒
1966年から96年解散まで「日本小説を読む会」会員
1997年から「小説を読む会」会員



著作「富士さんの置土産」
装画・挿絵 富士正晴



「摘神施人」



「樹下炊飯の図」



「木食刻木之図」



「懶琴動躡月清清」

古賀光さんに富士さんの生前を聞く

■富士さんとのつながり

富士さんに初めて会ったのは、京大の多田道太郎先生と山田稔先生が中心に活動していた「日本小説を読む会」でした。あるときその会に富士さんが現れ、小説談義に盛り上がりました。そして後日、会で一緒にいた杉本秀太郎先生から「富士さんのところへ遊びに行くけど連れて行ってあげよか」と声を掛けてもらい、初めて家を訪ねてビックリしました。その家は茨木の間部山間にあり、よその庭か畑か分からないようなところを抜けて行きます。家は藁ぶき屋根にトタンを張った農家風の家で、玄関の戸は蹴飛ばさないと開かないほどでした。その後何度か富士家に行くうちに、富士さんから「VIKINGに安光という男あり、会うや」と葉書が届きました。



書き上げた挿絵の前で（茨木市福井の安光さん宅）
昭和58年4月

そして、富士さんの紹介で安光と結婚し、子どもたちの名づけ親にもなってもらいました。自宅が近かったこともあって、よく絵を描いてもらったり、お惣菜を届けたり、晩年には身辺のお世話

■富士さんの交友関係

富士さんは、竹林を動かない人というイメージを持たれていますが、実はけっこう出歩くのが好きで、若い頃は京都や神戸によく出かけていました。友だちと飲み歩いたり、その勢いで知人の家に押し掛けて2、3日泊まったりしていました。さらに、人間に興味があった人で、会った人に自叙伝を語らせるのがうまい人でした。

富士さんの幅広い交友関係は、若いころから築かれていました。小説家の開高健さんは妻の牧洋子さんと一緒によく訪ねてきて、富士さんとの雑談からヒントを得て「日本三文オペラ」を執筆しました。「VIKING」の同人やマスコミ関係、小説家を志す人など様々な人が、富士さんのなにもものにもとられない豪放な人柄に惹かれて会いたいと訪ねてきました。そして、富士さんは訪ねてくる人を拒まないという姿勢で家に招き入れ、次々と面白い話を繰り出しました。ただ、人を見る目は鋭く、近づきたいと思う人もいたようです。

■絵心からみる富士さん

富士さんは絵描きになろうかと思っていたくらいで、作品は力強く繊細で何

もしました。その様子は、「富士さんの置土産」という本にまとめさせてもらいました。

かほのぼのとした雰囲気です。棟方志功さんとも交流があり、墨だけでぼてぼてと描いた絵は、棟方さんの筆致とも似た面があります。棟方さんのところにあった富士さんの絵を間違えて持ち帰ろうとした人がいたという笑い話もあります。

■富士正晴記念館

富士正晴記念館には、富士家から寄託された8万点におよぶ資料があります。これは一人の文学者が残したのものとしては最大級のもので、さらに、書齋を復元したものは、古賀さんによると「こんなにきれいなものじゃなかったですよ。部屋の中には本や資料が積み上げられ、足の踏み場もなく、壁に描かれた絵も見えたことなかったです。」とのことですが、当時の活動の様子を忍ばせるものとなっています。

富士正晴は川端康成ほどメジャーではないとしても、茨木の安威に36年間居住し、茨木で文筆活動を行い、茨木で没した作家です。立派な記念館もあるので郷土の作家としてもっと茨木市民に親しんでもらっていいのではないのでしょうか。

参考文献
富士正晴文学アルバム（富士正晴記念館発行）

「茨木市中央図書館」及び併設の「富士正晴記念館」は耐震工事のため、平成28年1月末まで閉館しています。